

本を選ぶ

NO.405 2019年(平成31年)2月20日

●発行／ライブラリー・アド・サービス

<http://www.las2005.com>

本社 〒335-0004 埼玉県蕨市中央5-20-1 TEL=048-432-3726

- <くろん・ぼわん>メイフラワー
- 司書の眼 第35回
- 好きではなかった歴史の授業、そして今
- 彩り・・・LGBT・・・
- 帰ってきた図書館員(56)

●●●●●くろん・ぼわん●●●●●

メイフラワー

本棚に挿した本の入れ替えを始めると時を忘れる。並べ方を変えるのが妙に面白くてつい熱中する。判型をきっちり揃えれば視覚的には収まりが良さそうに見えるものの、大きさだけで並べしまうと両隣の本との関係で言えば座りが悪くなったりする。どうにも居心地悪そうだ。いや、こちらの気分が落ち着かないのだ。ここまで来ればもはや妄想の域に達していると気づき、夜中にひとり苦笑する。

気に入っている表紙が出てくると、本屋さんのように「面見せ」にしてみる。これは悪くない。背表紙だけを見ているのではもったいない。ノーベル賞作家カズオ・イシグロの『忘れられた巨人』の表紙もそのひとつ。風に吹かれてたわむ大きな山査子が描かれている。物語の中ではいささか不穩で象徴的な役割を負った山査子の木立や枝は、むしろとぼけた表情を見せている。単行本のこの表紙カバーのイラストレーションは森田MIWが描いた。

本文の中でこの山査子の扱われ方を今一度見てみようとはばらばらめくっているうちに思い立って、これまで敬遠していた電子書籍を試してみた。言い訳めくが、今回はそれなりの目論見があっ

たことで、この先電子書籍版だけで読書しようというのではない。

とにかく楽天が提供するkoboやアマゾンのKindleの両方を体験してみよう。専用の端末を使わなくても、PCの画面で読める。インストールも購入も至って簡単だ。実際には小説を読むと言うよりは、モニターに現れる文字列を漁る、そんな感じだろうか。

電子書籍や雑誌電子版の最大の利点は、検索機能やウェブとの連携だろうか。だから、専門研究者には福音であるに違いない。特定の語句や単語、固有名詞が瞬時に検索できるのでシソーラスだって簡単に出来上がる。かつてのようにカードを起こして集計しなくてもすむし、付箋も要らなくなる。研究紀要や学術雑誌が電子化されたのは当然の流れだ。

『忘れられた巨人』を棚に面見せで立ててから数日経って思い至ったのが、文庫版の表紙カバー(イラストは桑原紗織)。同じ山査子でも全く違うイラスト。原書版の表紙同様に、こちらは本文の意に添うかのように暗い色合いが単色に近く、山査子特有の棘が逆立ち、枝振りも不吉なトーンをまとう。単行本と後から出した文庫版の表紙の違いについての出版元の意図ははかりかねる。

今一度単行本の表紙を眺めてから面見せを止めて、棚に戻した。すると背表紙の端に小さく描き込まれた怪物らしき黒い姿に目が止まる。気付いていなかった。修道院の地下で遭遇した獣であろうか。あわてて検索してみるはめに。(埜村 太郎)

司書の眼 第35回

— ビリギャルから働哭まで —

鷹野 祐子

ビリギャル、『学年ビリのギャルが1年で偏差値を40上げて慶應大学に現役合格した話』（坪田貴著／KADOKAWA）は2013年にベストセラーになったので、ご存知のかたも多いと思う。さやかちゃんという愛知の中高大エスカレーター式のお嬢様学校に通う高校生が、私立中高一貫校に入学したもののその後まったく勉強をせず、高校2年生になってから一念発起して勉強しはじめて、慶応大学に現役合格した、という大学合格体験記である。ちなみに、私はこの本の表紙の子がさやかちゃんだと疑わず、常々可愛い！と思っていたのであるが、実はこの子はモデルさんで、本当のさやかちゃんは、お母さんの「ああちゃん」が出版した『ダメ親と呼ばれても学年ビリの3人の子を信じてどん底家族を再生させた母の話』（ああちゃん、さやか著／KADOKAWA／2015）の表紙に出ている女の子でした。

さやかちゃんは慶応大学を卒業後、究極のサービス業としてウェディングプランナーになる。で、またいろいろあって現在は高校生への講演会などで全国を飛び回っているという。

家庭内問題をきっかけに

さやかちゃんと同じように、一念発起大学受験体験記をもう一つ読んだ。『暗闇でも走る（発達障害・うつ・ひきこもりだった僕が不登校・中退者の進学塾をつくった理由）』（安田祐輔著／講談社／2018）。安田氏はNPO法人キズキを立ち上げた起業家である。安田氏には発達障害があり、それが原因のいじめとそれに対抗するための非行、家庭内DV、一家離散、高校受験、不登校から一念発起しての大学受験。安田さんの場合、「変えよう」と思った時期が高3だったので、それから2年間猛勉強し、2浪の春に国際基督教大学（ICU）に入学した。ICUでは国際的な活動をするサークルに入った。世界の紛争や貧困問題に関わり、貧困の中にも人としての尊厳があり、所得が多くても

自分の尊厳を守れないという現状に直面する。大学卒業後、大手総合商社に入社したものの、会社での役割と自分のめざすものとのギャップに苦しみ、4か月でうつ病発症・退社。その後ひきこもり。そして、「困難な中でも精神的な豊かさがある事」の大切さに気がついた。大学時代の仲間と一緒に、自らの生い立ちと同じような境遇の不登校気味の中学生・高校中退経験者など困難を抱える学生が未来への希望を見いだせるような学習支援を行う「キズキ共育塾」を立ち上げた。

この安田氏が、かなりのイケメンであると思うのはわたしだけではあるまい。安田氏は横浜で生まれた。小学校の時に父親の不倫により家庭崩壊し、自ら家を出たいと思って寮のある中学校を探し出して中学受験をした。発達障害を抱える彼の勉強法は並みの努力ではなかったが、みごと授業料免除の特待生で入学した。

しかし、その特性と、管理主義的な学校が合わず、中2で中退。祖母の家から通う公立中学から底辺高校に進学し立派なヤンキーとなる。そして18歳の時に、9.11が起り、それをきっかけに受験勉強をはじめた。

そもそも、中学受験に成功したビリギャルのさやかちゃんも勉強をしなくなった理由は、家庭内問題であった。夫婦不和に、父の弟への溺愛、教育方針の不一致などが原因になり、クラスの派手目な友達と遊び歩いて、たばこや何やかやと無期停学も食らっている。そんなさやかちゃんが、信用できる大人である、塾講師の坪田先生に出会ったことで、人生を変えようと思った。それも「面白い人にであえる大学に」行きたいと慶応を目標にした。安田氏は、さやかちゃんの坪田先生みたいに、変化を起こしたいけど信じられる大人がいない、というような子どもたちの学習支援をしている。講師も7割はひきこもりや中退を経験してきた人たちで、完全な個別指導による学習支援と生徒の精神面の支援を大切にしている。

自己肯定感を育むことが大切

発達障害を持つ子供たちが大きくなると、二次障害というものになることがある。多くの発達障害の子どもたちは知的に遅れはないので、その特徴が周囲から理解されづらく、不適切な対応をしてしまう可能性がある。その時に、否定的な評価や叱責により自尊心が低下し情緒の不安定や反抗的な行動、深刻な不適応などが起こる可能性がある。そういった問題が起こらないために、自己肯定感を家庭や学校で育むことが大事なのだそうだ。

この点では、ビリギャルさやかちゃんのお母さんである、ああちゃんの教育法が素晴らしかったので紹介したい。ああちゃんの著書を先ほど紹介したが、さやかちゃんがどんなに学校で怒られようとも、「こないいい子はいません」と言い切っていた。しかし、その境地に立つまでは、ああちゃん自身の生い立ち、ああちゃんの母の生い立ち、と長い連鎖があり、幼い子供たちに叱責を繰り返す日々だった。同じく貧しい経済環境で育ち会社を起業した夫(さやかちゃんの父)とうまくいかず、夫婦関係は最悪なものだった。そんな環境がさやかちゃんたち兄弟に影響したのではないかと述懐している。

ビリギャルを読んで、このああちゃんの教育方針について講演してほしいという要望があるそうだ。それで、さやかちゃんは、起業してこういった講演会や自暴自棄になりがちな高校生へ語りかける活動をしている。ちなみにビリギャルでは、著者の坪田先生による心理学を駆使した受験勉強の仕方も乗っているの、ぜひ参考にしてほしい。安田氏の勉強方法は、受験仙人になる気がないと、難しいかもしれない。

Do The Hokey Pokey

テニスの大坂なおみ選手が、全米オープンに続いて全豪オープンでも優勝した。グランドスラムならぬ、ナオミスラムを目指すという彼女の笑顔はまぶしかった。その前に男子シングルの錦織選手が1回戦2回戦4回戦をフルセットで戦い、

準々決勝で棄権した。日本のテニスプレーヤーもここまで来たか！という思いでいっぱいである(大坂なおみ選手はアメリカとの二重国籍で、3歳までしか日本にいませんが日本選手として登録しています)。

この一球は絶対無二の一球なり
されば身心を挙げて一打すべし
この一球一打に技を磨き体力を鍛へ
精神力を養ふべきなり
この一打に今の自己を発揮すべし
これを庭球する心といふ

福田雅之助氏の言葉である。スポーツマンガが好きなら一度は聞いたことのあるこの言葉、ということで、「エースをねえ！」(山本鈴美香)をコミック文庫版で再読した。いやあ、1970年代の週刊マーガレットに連載されたこのマンガ、ハイネ、高村光太郎、若山牧水の詩が引用されたり、弱冠27歳の宗像コーチや桂コーチ、日本庭球協会の竜崎理事の言葉が本当にいい。普通、学生チャンピオンの娘に「先駆者は常にすて石だよ」なんて言えます？ 藤堂さんやお蝶夫人も二十歳そこそこのですけど、今の私より人間できている。

後半、親友を再起不能にしまった桂コーチの「慟哭の中にこそ心理があり真髓が見える」「ぬるま湯につかったように生きて死んでいく人間が多い中で慟哭を味わえる人間は幸せなのだ」という言葉がある。「慟哭」なんて、味わうことがなければ、その方がいいように思うが、♪ひと晩じゅう泣いて泣いて泣いて・・・後半第二部では号泣しながら読み終わって、私は気がついた。宗像コーチは、骨髄性白血病だったから、今の時代だったらもしかしたら抗がん剤治療などで助かっていたかもしれない、慟哭を利用して岡ひろみが世界へ行くという計画も成功しなかったかも？

私のような凡人はせめて「力を出し切れないプレーをすることこそを恐れなさい」というお蝶夫人の言葉を心に、今日も仕事をしようと思ったのでした。

(たかの ゆうこ：医学系研究所図書室)

好きではなかった歴史の授業、そして今

溝上 牧子

子どもの頃の記憶を時々たどると、驚くほど勉強した記憶がない。得意な教科もなかったのではないかと思う。いろんなものを頭の中で考えたり、体を動かして働くこと。そんなことは好きだった。実践主義といえど聞こえがいいが、今客観的にその頃の自分を振り返ると、机上の勉強よりも生きることに直結した物事に魅かれていたんだと思う。

植物を育て、虫を捕まえ、自分でおやつを作るのも好きだった。なめくじが塩で本当にとけるのか、大量の塩をかけてみたり…、積もった雪で一人かまくらを作ったり。友達とも遊ばないわけではないが、もくもくと一人で何かをするのが好きで、ケーキやクッキーをオープンに入れて焼けるまでの様子をガラス越しに見ているような子どもだった。

幸いにも勉強で人と比べられることのない学校に8年(中・高・短大のようなもの)、おまけに通知表もない、中間・期末テストもない学校に通うという学生時代を過ごした私は、自分に合う環境の中で育つことが出来たのかもしれない。受験勉強もしない私をよく入れてくれたものだ。先に入学していた姉兄のおかげだろうか。

そんなわけで(?)今だに勉強の仕方が判らない私が出来上がった。受験勉強とも無縁の私は、暗記すればいいという勉強法は試さずじまいだ。そもそも興味と本気がないと暗記するのさえ苦手なのだから。歴史は覚えることの多い教科な上、それぞれの時代に興味が持たず、今でも苦手な分野の一つである。

しかし、大人になった今、自分の国のことを何も知らずにきてしまったことを後悔している。20代にアメリカ人の青年に会った時、日本好きの彼の方がはるかに日本に詳しくて、質問にも答えられず恥ずかしかった思い出がある。テレビなどでも海外の報道を見るにつけ、他国の若者たちが自

分の国の歴史的背景、現在の政治について実によく分った上で自分の考えを語る姿に驚愕する。いや本来そうでなくてはいけない。自分の国のことなのだから。恥ずかしながら、私が政治や、歴史に関心を持つようになったのは若者とは呼べなくなった年齢をとうに越えた、ここ10年弱のこと。

仕事を通して歴史に関するものに触れる機会が増え、気づいたのは、教科書だけが歴史ではないということ。当たり前だが教科書は歴史の大枠の一部。また歴史関連の書だって書く人によって様々だ。書かれていたり書かれていない事実がそれぞれあり、考え方も違う。中心である政治のほか、地方のこと、庶民の生活もあり、多方面多角度から見なければ本当の姿は見えてこない。出来事、政治、物、人。それぞれにそれぞれの歴史があり、様々な角度から見て初めて歴史が立体的にたちあがってくるものだという事に気づく。

そのことを自覚してから、つまらないと思っていた歴史が少しだけ面白く感じられるようになったわけである。何でも表面だけではペラペラの薄っぺら。けれど歴史を身近なところからたどれば、案外歴史も面白い。祖父母、両親などから自分のルーツになる昔話を聞かせてもらうことなどは歴史の基本なのではないだろうか。

最近母から聞き始めた話が本当に面白く、日本の歴史と自分のルーツとの関係が頭の中ですこしずつリンクする。若かりし母が当時どう感じていたか云々を聞くことも大いに参考になる。記録したらもっと面白いだろうなあと思う。昔の私は、考古学者が大昔の欠片からもロマンを感じるという言葉を信じていなかった。しかし…なんと、ある日、奈良の平城京跡を訪れた私は、柱のあとだけが並ぶ、何もない場所で、なぜだか悠久の時の流れを感じていた。人間変われば変わるものだと自分のことながら感心してしまった。

(みぞかみ まきこ：朔北社)

神部 京

「いろとりどりの親子」という映画を観た。この映画は作家アンドリュー・ソロモンのベストセラー『FAR FROM THE TREE』というノンフィクションを映画化したものである。

アンドリューは、自分が同性愛者であることを両親に打ち明ける。苦悩しながらも彼を受け入れようと努める両親の姿をみて、自分達以外のほかの親子が、子ども達の“違い”にどのように向き合っているか興味を抱くようになる。今回映画化された「いろとりどりの親子」では、ダウン症、自閉症、低身長症、罪を犯した子どもを持つ親、LGBT、それぞれの親子の関係が映し出されている。どの親子にも共通して感じたことは、親は子を愛せずにはいられないが、受容するということはそれとは別に様々なプロセスを乗り越えていかなければならない時があるということだ。そして、この“違い”をアイデンティティとして築いていくには、自己による受容、家族による受容、そして社会による受容それぞれが絡んでくる。

私自身、この映画で取り上げられた様々な“違い”についてどれだけのことを想像できたか分からない。しかし、この映画を通して、何とも言えないもどかしさの一方で、命の尊さや輝きを強く感じた。そして、存在している様々な“違い”について知りたいと思った。知らないことは、時に恐怖を感じたり、嫌悪感に繋がることもある。知らないことを自分から突き放してしまうのではなく、関心を持つことで、“違い”が当たり前のものとして共存できるものになっていくのではないか。そのことを知る手段として、本の中でどう出会うことができるだろうか。

今回は、LGBTが描かれた作品について触れていきたい。

『ジョージと秘密のメリッサ』（アレックス・ジーノ作 / 偕成社 / 2016）は、トランスジェンダーの子どもの気持ちを描いた作品。主人公のジョージは外見は男の子だが、自分のことを女の子だと感

じている小学4年生。ジョージは、テレビやインターネットの情報から自分はトランスジェンダーであることを自覚する。男の子のふりをすることが苦しいと感じたジョージは、家族やまわりの人に本当の自分を知ってもらいたいと思うようになる。ジョージは、学校で上演する劇で女の子の配役を演じたいと思っていた。自分らしく演じることが出来たら、本当は女の子だと分かってもらえる気がしたのだ。

もう一作、『パンツ・プロジェクト』（キャット・クラーク作 / あすなろ書房 / 2017）は、外見は女の子だが、自分のことを男の子だと感じている中学1年生になったリヴが主人公。リヴは制服のスカートを履くことが嫌でたまらない。そこで、校則と闘う「パンツ・プロジェクト」という計画を考え出す。また、リヴは弟と2人のママと暮らしている。ママ2人と暮らす家族を描いた作品は他にも『ふたりママの家で』（パトリシア・ボラッコ文 / サウザンブックス社 / 2018）という作品がある。ジョージもリヴも、大切な人にこそ本当の自分を打ち明けたいと思い悩む。どちらの作品もユーモアがあり、ありのままの主人公を受け止めようとしてくれる友達の存在が、深刻な空気を纏わせない。

『性の多様性ってなんだろう？』（渡辺大輔著 / 平凡社 / 2018）は、物語の中だけでは掘みきれなかったことや、それぞれの主人公が生きづらさを感じた規則や社会的枠組みなどの背景についても幅広く提示してくれる。以前は病気とされていたLGBTが最近では個性として社会に受容されたプロセスも感じられる。また、性についての捉え方は、一人ひとりが違っているものであり、「女らしさ」「男らしさ」についての既成概念についても考えさせられる。社会的規範に沿って物事を考えようとする時、その社会的規範となる前提がどのようなことを掲げているのか。そうしたことから改めて耕していくことが大切だと感じた。（かんべ みやこ）

帰ってきた図書館員 (56)

— イベント流行りの図書館・本を守る人々 —

山下 青葉

小学校図書室お泊り会

愛読している国立国会図書館のメールマガジン「カレントアウェアネス」の2018年11月8日号に、大阪市旭区の大阪市立大宮小学校で夏休み期間の8月3日夜から4日朝にかけて、「ナイト図書室」と銘打って図書室お泊り会を行ったという記事があった。

最近の子どもの読書離れ、携帯ゲーム漬けは保護者にとって悩みのタネであろうかと思われるがそんな子ども達に読書に気軽に親しんでもらえるきっかけとして、地元の大宮子ども会育成連合協議会が立ち上げた企画とのことだ。

参加者は17名の4、5、6年生。夕食とお風呂を自宅で済ませ、19時に学校に集合。携帯ゲーム機やスマホを持ち込み禁止とし、心ゆくまで読書を楽しむという趣向である。図書室に布団も用意され本を読みながら寝落ちできるという、本好きのおとなにとっても天国のような設定である（確か東京にベッドと本棚が近接している宿泊施設があるのを雑誌の記事で見たことがあるが、このような感じだろうか）。

開催にあたり、このような催しに参加するのは本好きの子ども達と思われ、図書室の本はほとんど読んでしまっているのではないかということが懸念されたので、教頭先生の発案で地元の市立図書館に本の貸出を依頼した。

貸し出された本には怪談本が多数混じっていて選定された図書館の配慮が感じられたとのこと。本を選んでくれた図書館員の思いが伝わるといっても、この企画の効果のひとつと言ってもよいのではないだろうか。

最初は修学旅行の夜のように枕投げをしたがるような子どももいたものの、最終的には参加者全員が落ち着いて読書をしていたようだ。朝まで起きていた子どもは2人だったとのこと。

この企画は参加した子ども達にも保護者にも好評で、保護者自身や今回参加の対象にならなかつ

た低学年の子ども達からも参加希望の声が多数あったそうだ。学校の図書室で特別な体験をすることがきっかけとなって子ども達に読書の習慣がついてくれればと、主催された方々は次回開催に意欲的な模様である。

自分の勤務している図書館では、ぬいぐるみのお泊り会は行っているものの、人間のお泊りは発想としてもなかった。言われてみれば、こんな企画があったら自分も参加したいと思うだろう。

おとな向けの図書館お泊り会

同じ「カレントアウェアネス」で、この催しの前月に埼玉県杉戸町立図書館でおとな向けの図書館お泊り会の参加募集がかかっていたのを、この小学校の記事を見た後に発見した。

ネットのニュースサイトでこの催しの詳細を見たところ、こちらは参加者を20歳以上に限定していたので、館内で日本酒のサービスがあり、近隣の温泉施設が利用できるというさらにうらやましい企画であった。

当日の様子が写真で何点かアップされていたのだが、2006年に開館した比較的新しい図書館のためか、館内はとてもきれいで快適そうに見え、参加者が思い思いにカウンターの後ろや書架の間の通路などに自分の場所を定めているのが何ともいい感じで写っていた。

昨今の図書館イベント

最近、図書館をPRするために各種行事をたくさん行うことが流行ようになってきた。工夫をこらした楽しい行事は確かに参加する方も企画する方にとっても楽しいものであるが、自分の所属する図書館のことで言えば、何となく図書館がイベント企画会社になってしまったかのようで、本来業務とかけ離れてきているのではないかと感がぬぐえない。

先ほどの杉戸町の図書館お泊り会も、たまたまだったのかもしれないが、ニュースサイトのインタ

ビューにこたえていたのが、町外からの参加者ばかりだったのが気になった。

せっかくのイベントも肝心の町民の図書館の利用ということに繋がらなければ、ニュースとして良くても意味がないのではないだろうか。

本があればこそ

今から6年ほど前にこの欄で、東京・神田の老舗蕎麦店が火災にあった際に伝統の「かえし」が持ち出せなかったという話をきっかけに、2006年に出版された『バスラの図書館員』（ジャネット・ウインター絵と文／長田弘訳／晶文社）を紹介した。

イラクの文化的中心都市であるバスラの中央図書館の司書であるアリア・ムハンマド・バルクさんが、イラクの侵攻に遭い図書館が消失の危機に陥った時、友人や隣人の助けを借りて3万冊の蔵書運び出して難を逃れたという実話に基づいた絵本で、短い話ではあるものの大変感動を覚えたのだった。

それから12年、そのイラクの隣国シリアでの本にまつわる出来事を書いた『シリアの秘密図書館 瓦礫から取り出した本で図書館を作った人々』（デルフィーヌ・ミヌーイ／藤田真利子訳／東京創元社／2018）を読む機会を得た。

著者はイスタンブールに在住する中東問題を専門とするジャーナリストで、シリアの現状を伝え続けている。

ある日、フェイスブックで書棚の前で本を読む若者の写真を見たことがきっかけで、シリアの首都ダマスカス郊外の町ダラヤに住む若者たちが内戦の爆撃の下で、瓦礫の中から1万5千冊もの本を掘り出し、地下に図書館を作ったことを知る。

この本は、そのことに興味を抱いた著者が投稿者である23歳の青年アフマドとほぼ1年に渡りスカイプとメッセージングアプリのワッツアップで行ったやり取りを記録したもので、包囲と爆撃が繰り返される中、若者たちが本に読むことによって成長し、希望を捨てず困難に立ち向かう様が描かれている。

若者たちは、民主化を求める反体制派の側にいるが、元々ダラヤには平和主義市民運動の伝統があったことから、武器の使用を最低限必要な時だけにとどめているのが文章から伝わってくる。だからかなおさら恐怖の中で正気を維持している彼らの苦しい思いが伝わってくるような気がするのだった。そして彼らが知性を捨てずにいられたのが本の力によるものであったということに、感慨を覚えずにはいられなかった。正に人はパンのみにて生きるにあらずである。（やました あおば：図書館員）